

シベリア抑留秘史（断片）

福岡市東区 國松 弘

昭和20年8月8日、ソ連軍は対日不可侵条約を弊履の如く破棄、対日宣戦を布告する。

戦局いよいよ苛烈を極め、関東軍精鋭は南方へ転進、その直後、残留関東軍は急遽在満州（現在、中国東北地方）邦人の空前の大召集を敢行、員数補填で形ばかりの「張り子の虎」的軍団を編成する。

ソ連軍はこの情報をいち早く探知、間髪を入れず怒濤の如く満州国内に乱入…非戦闘員の婦女子を虐殺、暴行等悪魔の牙を向け全満州を嵐の中に包む。…8月15日終戦の詔勅が下り、以来関東軍は案山子の如き集団に豹変、吾が部隊も四平街へ転進中、ソ連軍突如の出現で「白旗」を掲げアツけない降服の幕切れの後、ソ連軍に全員拿捕される。

9月初秋ソ連軍命令に依り移動令が下る。スワ帰還と全員ヌカ喜びをよそに、ソ連指示の貨車に鮎詰め、北海に向う。全将兵はこの貨車はウラジオ経由日本へ帰還と独り決めにする。しかしソ連軍の巧妙な戦術にマンマと乗せられ、日本将兵60万人はシベリアの地に連行される。輸送中ソ連監視兵は口を揃え「お前達はこの貨車でウラジオ経由東京ダモイ」と尤もらしく吹聴する。ところが当てどもなく進む貨車に数十日間を過ごしたある朝、なんと海が見えると全員一斉に呼び出す。確かにウラジオ沿岸の日本海の幻想に取り憑かれ全員躍り上る。それも東の間、そこがシベリア最大のバイカル湖と判ると、今までの狂喜は落胆に逆転、水を打ったように静まり返る。

嘘で固めたソ連の陰湿な隠密作戦には歯が立たず、ここで始めてソ連軍から王手飛車が打たれた事に遅まきながら気がついたのである。

言葉も風俗も違う異国の空で最終的に脚が留められた所は、遙けくもソ連領最寒の地、イルクーツクであった。気温零下30度、凍りついた原野は一面白雪に被われる。

さてここからシベリア捕虜残酷史の一が兆される。厳寒、酷なラポート（労働）、極度な食糧不足に疲れ果て、その間多くの犠牲的死者が続出する中、捕虜は望郷の念にかられ「俺達はこれから先、どうなるのか、このまま異国の果てで野垂れ死か」不安・焦慮の悶々たる日を過ごす。

建築現場の土木作業の第一歩は酷寒の中、馴れぬ穴堀作業である。腹ペコの腕には、15kgの金棒振りは根気・気力も尽き果てる。しかし作業は続けねばならぬ。

これらを克服し生きるためにはまず食べることだ、現状のソ連食糧ではこの身が朽ち果ててしまう。死んでたまるか、生への手段を頭に画く。まず相手から善悪抜きに搔っ払いを強行することだ。密かに現場の原木を監視兵の目を掠め担ぎ出し民家と折衝、少量のパンと交換。

まさに命懸けの仕事である。しかしこれも長く続くものでない。かねてソ連側は察知、違反者に銃殺令が出る。ここで命の絆が断たれる。

されど捕虜もパンのためにはそんな脅し文句は空念仏だ。御身大切、背に腹は代えられぬ。掻っ払いには依然、場所、手段を換え続けられる。建築現場、無味乾燥、何の変哲もない、加えて空腹に我慢の最低線までおし込まれながら耐えた一日の苦役も、夕闇迫ると解放され、ソ連兵監視の下、8 kmの坂道をヨレヨレ歩きで営門を潜る。先は夕食あるのみ、中身は水をタップリ混えた御粥、それでもガツガツしながらパク付く。食後の一服の紫煙に無上の潤を得、ここで休息と思いきや、集合令がかかる。班員の一人がヘマをやらかしその煽りを受け班全員が大鼓ビンタの鉄拳を喰らう。

まさに現役時代と変りなき軍隊階級制に物を言わせ抵抗の術を知らない兵はただ口惜しさに耐え黙々と屈従する。敗戦後の今日、異国の地でこんな惨めな仕打ちを受けねばならぬとは。

ああこれが頑迷な帝国陸軍の権力の亡霊にしがみつく己を知らざる成れ果ての姿であった。

兵は昼間の作業でソ連側から痛め付けられ疲れ果て、それらを意に解せず上司は階級の胡座の下、無情な暴圧は止む所を知らないのである。これでその夜は終わったのではない。就寝間もなく第三の見えざる敵、虱群の執拗な攻勢が繰り返され、その痒みに睡眠もろくろく取れず焦ら立ちの一夜を過ごす。

とにかくこの営舎は地獄部屋と言っても過言でない。ここにはソ連人ならぬ類似日本人が己の感情の赴くまま、兵を撲殺、暴威を振ったT軍曹の専横、あるいは上官どもは未だに兵を虫虻同然視しての暴君振りを発揮したのである。

これが捕虜収容所の実態であり、かくも悪の条件が出揃った人間社会は想像も及ばぬ悪虚無道の徒輩の溜り場でもあった。

かかる悲惨な話は尽きない、残念ながら紙数の都合で以下省略する。

話題を変える、前述のような人間性の一片も見い出せない集団の雰囲気をもよおし、潤のある人情味溢れる1シーンを特記する。

(民家の二階の窓からラジオが) …

現場で監視兵の目を掠め民家の周辺を獲物？探して彷徨しておる時、突然二階の窓から年若いソ連人マダムが笑みを湛え窓際に姿を現わす。とたんにラジオが鳴り出しかって聞き覚えのある日本人アナウンサーの声を耳にする。暫時するとなんと懐しい歌謡曲「東京ラブソディー」の軽快なメロデーが流れ出す。

夢ではないかと耳を疑う。私一人だけ聞くのも惜しまれ、急ぎ同年兵に知らせる。駆け付けた彼等はラジオに喰い入る様に耳を澄ませ無言の中、淡い感傷に耽ける…なんと感激の1シーンであった。それも束の間、かなたに歩哨の姿が見え、二階の窓は静かに閉ざされる。

とたんに我に返りお互い顔を見合わせ、おお日本は健在だ、今頃は日本はアメリカ軍に占領され且つての故国の様相は既に失くなったものと、半ば自暴自棄的な想いをしておった矢先のことであり、日本の情勢が闇雲の裡に包まれておっただけに、この一瞬のラジオは改めて捕虜に強い心の支えを抱かす。異国で思いもよらぬラジオを聞かせてくれた、あの年若き婦人の好意に万感の憶いを込めスパーシーバと叫ぶ。

帰隊して皆に知らせる。全員躍り上り歓声の渦が湧く。それもそのはず、抑留以来日本の状況は固く閉ざされ、もはや日本はアメリカ占領下に置かれ、破滅的状态と思われていたのだ。

諦めと捨て鉢気味な思いが交錯し、虚な心境にある時、このニュースは捕虜に起死回生の歓びを与えたのである。

それにしてもラジオを聞かせてくれた女性の単なる思いやりであっただろうが、捕虜にとっては偶発的にせよ心の大きな糧になったのである。いよいよ窓を開いてこのラジオを聴きなさいとまで、好意を示した婦人といい、その後も民間人から温い仕草を寄せられたことがしばしば見受けられたのである。

民族が異なるとは言え平常心に戻った人間本来の和やかな姿はかつての醜い闘争を超越して、計り知れない心からの柔い気持に接したのである。スターリン隷下の冷い眼差しと前述のソ連人のお人好しの貌、白黒が入れ混じる二つの顔がソ連には現存しておられると思われる。